

益田市長
山本 浩章

もともと今年の8月25日から9月6日まで実施される予定だった東京パラリンピックは、オリンピックと同様、新型コロナウイルス感染症の世界的流行を受け1年間の延期となりました。

そもそもパラリンピックがオリンピックと同じ年に開催されるようになったのは、1960年のローマ大会からです。その4年後の東京オリンピックの際も同じようにパラリンピックが行われました。その後の5つの大会においては、オリンピックとパラリンピックの開催地が別々でしたが、1988年のソウル大会から再び同じ都市で開催されるようになります。現在に至っています。

パラリンピックを始めとするパラスポーツ（障がい者によるスポーツ）を見てみると、人間の努力には、不可能と思われることを可能に変えてしまう力があることがよくわかりま

す。そして実際、パラアスリート（障がいを持つ競技選手）は、健常者である一般の選手以上に身体能力を効果的に発揮していることが、近年の研究で明らかになっていきます。身体機能の一部が失われたとしても、それを補う機能がよりの確にコントロールされるように運動をつかさどる脳が再編されることがわかってきたのです。このことは、単に競技の世界にとどまらず、障がいのある人すべての持つ可能性を示しているとも言えます。

益田市では、オリンピックとパラリンピックの両方で、アイルランドの自転車チームの事前キャンプ誘致を進めてきました。昨年にアイルランドから選手や関係者が来られた際は、小中学生を含む多くの市民との交流イベントが実施されました。また、すでに「共生社会ホストタウン登録」も行いました。

「共生社会」とは障がい者のためのものと捉えるのは間違いです。障がいの有無にかかわらず、すべての人がその個性や特徴を尊重され、最大限生きがいを追求することができ、社会を指すと考えられます。多様なあり方を互いに認め合い、配慮し合えるまちこそが、一人ひとりの市民がどんな境遇にあっても幸福を感じできるまちです。

日本遺産のまち益田の歩き方

第1回 櫛代賀姫神社とその眺望

【問い合わせ先】 市文化財課 ☎ 31-0623

今年6月に日本遺産に認定された「中世日本の傑作 益田を味わう」地方の時代に輝き再び」。本連載では、その構成文化財の見どころを紹介します。

益田川河口の東に位置する櫛代賀姫神社は歴史が古く、延長5（927）年に編さんされた「延喜式神名帳」に櫛代賀姫命神社と記載されています。所蔵する僧形神坐像（鳥根県立古代出雲歴史博物館寄託）は、平安時代の神像で、制作年代は11世紀に遡る可能性があり、鳥根県の神像彫刻の古いものとして、その代表的存在に位置づけられています。

現在の本殿は江戸時代のもので、一部に、天正12（1584）年に益田氏が再建した時の部材が使われています。また、針拾い、角力、獅子舞という民俗学的に注目される3つの神事を伝えています。

さらに、地元の方によって整備された境内からは益田平野を見渡すことができ、歴史の背景となった地形をよく理解することができ、かつては、眼前を流れる益田川に高津川が合流し、砂州が発達したこともあり、河口域が潟湖状になっていました。この地形が、

日本海の強風と荒波を避ける上で格好の条件となっていました。日本遺産をめぐる旅の出発点として、旅の安全を祈り、その眺望からは、歴史の背景となった地形を理解することができる場所です。

場

久城町 963
石見交通バス久城線（久城行）
久城バス停から徒歩5分



櫛代賀姫神社からの眺望。眼前に益田川の河口。右手奥の松林が砂州。